

# 教育研究業績書

2023年10月23日

所属：薬学科

資格：教授

氏名：濱 宏仁

研究分野	研究内容のキーワード
医療薬学	抗がん剤バイアルの製剤の有効利用と安全使用
学位	最終学歴
平成25年11月 武庫川女子大学 博士（薬学）	昭和63年3月 京都薬科大学薬学部薬学科卒業

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 神戸市立医療センター中央市民病院薬剤部 2. 武庫川女子大学薬学部 非常勤講師 3. 教育担当責任者	2019年4月1日～ 2016年, 2018年 2013年4月～2019年3月	薬剤部 嘱託職員  病院薬剤部業務における担当。実習生・レジデント教育・指導を含む。
<b>4 その他</b>		
1. 平成29年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）注射用抗がん剤等の適正使用と残液の取扱いに関するガイドライン作成のための研究班 2. 厚生労働省マルチユース安全性検討会委員 3. 日本病院薬剤師会「医療上必要な薬剤の市販化に向けた調査検討委員 4. 日本病院薬剤師会学術小委員会第4小委員会委員 5. 東日本大震災南三陸町医療支援チーム救護所活動	2018年10月～2019年03月  2018年09月 2015年～2016年 2012年～2016年 2011年4月	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 第1種衛生管理者 2. 薬剤師	2016年3月 1988年5月	
<b>2 特許等</b>		
1. フィルタ組立品及びフィルタ 整理番号R18042	2016年3月	発明者
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 神戸市立医療センター中央市民病院 薬剤部 2. 神戸市立西神戸医療センター 薬剤部 3. 神戸市立医療センター西市民病院 薬剤部 4. 神戸市立医療センター中央市民病院 薬剤部 5. 国立大阪病院（現 国立大阪医療センター）薬剤部	2019年4月～ 2018年04月～2019年03月 2013年04月～2018年03月 1989年07月～2013年03月 1988年4月～1989年6月	嘱託職員 副薬剤長 副薬剤長 2008年～主査
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 薬剤師レジデントマニュアル	共	2013. 3.	医学書院	橋田亨, 西岡弘晶編著, 濱宏仁 他. 卒後1, 2年目の薬剤師に向けて, 現場で役立つ情報を簡条書きで歯切れよく, ポケットに入るサイズに編集. 総論から各論まで, また52疾患について「患者の状態把握→治療（標準的処方例）→薬剤師による薬学的ケア→処方提案のポイント」の順に解説. 神戸市立医療センター中央市民病院の薬剤部・総合診療科が総力を上げて執筆. 担当：第2章 注射, p.9-16.
2. 安全な薬剤投与のための医療材料の選び方・使い方	共	2010. 3.	じほう	杉浦伸一, 橋田亨, 中西弘和 編著, 濱宏仁 他. 他医療安全対策の第一歩. シリンジ, グローブから輸液セット, CVポート, 携帯型デイスポーザブルポンプまで, カラー写真と図表でわかりやすく解説. 担当：Chapter 2 薬剤調製のための医療材料-6 ハザード回避の調製材料, .P.54-65.
<b>2 学位論文</b>				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2 学位論文</b>				
1. 抗がん剤バイアル製剤の有効利用と安全使用に関する臨床薬学的研究	単	2010年11月	武庫川女子大学	濱宏仁. 抗がん剤バイアル製剤の薬剤費の削減等を含めた有効利用と安全使用に関する適正使用を目的とした臨床薬学的研究の見解をまとめた. 本研究により, 微生物学的汚染の観点から安全性の担保を十分検証された製剤において抗がん剤バイアルをMultidoseとして残液を複数回使用することは, 非常に有用であり, その導入は検討を推し進めることに値することを証明した. さらに, ゴム栓に頻回針を刺入することによる液漏れ等の問題の解決のためにクロズドシステムPhaSealが有用であることを証明した. また, 抗がん剤バイアル製剤を取り扱う際の曝露対策の実施の必要性を示した.
<b>3 学術論文</b>				
1. Drug Vial Optimization導入のための使用期限設定に関する考察 (査読付)	共	2021年9月	癌と化学療法, 48(9), 1139 - 1143	Drug vial optimization (DVO) の導入により, 分割使用の使用期限内に使い切れない場合は医療施設側の廃棄薬剤費の負担が生じる. 試算により使用期限は1~2 日では必ず廃棄が発生し, 7日以上で大部分の廃棄がなくなることが示された. 経済的損失を伴わない条件で医療施設でDVO を導入するためには, 使用期限延長の検討が望まれる.
2. 要遮光医薬品の保管状況の実態と遮光保管に関する検討 (査読付)	共	2020年4月	医療薬学, 46(4), 222-229	要遮光医薬品の患者居宅での保管状況について, 84 %の患者は居宅で医薬品の光からの保護を意識的に行っていなかった. 照度測定の結果, 各薬袋での保管は一定の遮光効果があるものの完全遮光性はなく, 筆者らが作成した黒色着色袋 では遮光効果が認められた. 医薬品の保管状況に応じた曝光による影響についての一つの指標となった.
3. 単回使用バイアルの分割使用を前提とした保管条件の違いによるバイアル内無菌性保持の検討 (査読付)	共	2019年01月	医療薬学, 45(1) 21-27	濱宏仁. 単回使用バイアルの分割使用を前提に, バイアルの保管条件の違いによるバイアル内無菌性保持の検討を行った. BSC (ISOクラス5) が望ましいが, ISOクラス8環境下であってもゴム栓やCSTDが接続されていれば, バイアル内の無菌性は, 7日間保持されることが考えられた.
4. Singledose vial穿刺後の残液分割使用における安全性の検討 (査読付)	単	2018年09月	医療薬学, 44(9), 449-457	濱宏仁. Singledose vial残液の分割使用において, 再使用前にエタノール清拭を前提に, 保管条件, その手順および閉鎖系薬物移送システム (CSTD) の使用について検討した. ゴム栓上に微生物が付着した場合には, 穿刺時に微生物がバイアル内に混入する可能性があることが示唆され, Singledose vial穿刺後の残液分割使用は, CSTDの使用の有無に関係なく, 少なくともバイアルの穿刺部位をクリーンな状態に維持できなければ, バイアル内への微生物の混入が起りうることを確認された.
5. 抗がん薬により意図的に表面汚染させたバイアルの水, 次亜塩素酸ナトリウム及びオゾン水による簡易洗浄法を用いた除染効果の検証 (査読付)	共	2017年12月	医療薬学, 43(12), 663-670	濱宏仁, 成橋和正, 杉浦伸一, 中西弘和. バイアル表面の抗がん薬の簡易洗浄法を用いた除染効果を検証した. バイアルを水道水, 次亜塩素酸ナトリウムまたはオゾン水に浸漬後, 流水またはオゾン水で洗浄した. 抗がん薬除染量からの観点では, 洗浄条件の違いによる除染効果に差はなく, 抗がん薬のバイアル表面から検出されている低レベルの汚染量は, 簡易洗浄法で除去ができることが示唆された.
6. オゾン水および次亜塩素酸ナトリウムを用いた抗がん薬汚染環境の除染効果 (査読付)	共	2015年10月	医療薬学, 41(10), 740-749	濱宏仁, 田中詳二, 橋田亨. ガイドライン推奨の水酸化ナトリウムを使用した安全キャビネットの抗腫瘍薬の汚染除去は難しく, 抗腫瘍薬の除染に関する研究は不十分であるため, 化学療法センターの床をオゾン水と次亜塩素酸ナトリウムでの除染効果を評価した. NaOH, オゾン水, 次亜塩素酸ナトリウムのいずれも抗腫瘍薬の除染が可能であることが示唆された. さらに, 抗腫瘍薬はオゾン水および次亜塩素酸ナトリウムを用いた拭き取りで汚染除去が可能であった.
7. 調製から投与までの総合的な抗がん薬曝露対策の導入とその評価 (査読付)	共	2013年12月	医療薬学, 39(12), 700-710	濱宏仁, 平島正樹, 中西真也, 田中詳二, 橋田亨. 2008~2013年にかけて, 様々な抗がん薬の曝露対策を順次導入してきた. それらの有用性について, シクロホスファミド (CP) と5-FUを指標に拭き取り試験で評価を行った. 調製用閉鎖式システムやバイアル洗浄が抗がん剤による職業的曝露の減少に有用であり, CPのみを指標として抗がん薬曝露を判断してはいけないことが示された. 携帯型持続式薬液注入器調製への閉鎖式システムが曝露減少に有用と考えられた. 化

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
8.Verification of external surface contamination of Japanese 5-fluorouracil vials and removal of contamination by washing the vials (査読付)	共	2013年07月	Jpn. J. Pharm. Health Care Sci, 39(7), 451 - 456	学療法センターの汚染は、調製時のプライミングと、投与のための閉鎖式システムの導入により減少することが示された。 Koji Hama, Tohru Hashida, Kazusaburo Kataoka. 5-FUのバイアル表面が汚染されていることを確認し、水洗による5-FUのバイアル表面汚染の除去効果があることを明らかにした。
9.Microbiological Challenge Test of Contamination Caused by Using the PhaSeal System (査読付)	共	2013年03月	Jpn. J. Pharm. Health Care Sci, 39(3), 148-155	Koji Hama, Tohru Hashida, Kazusaburo Kataoka. 閉鎖系システムと金属針による汚染を評価するため、Bacillus subtilisを塗布し、微生物汚染レベルを比較した。バイアルが細菌汚染の影響を受けやすい調製条件下でPhaSealを複数回使用した場合、それは微生物汚染の点で最大5回の穿刺で金属針とほぼ同等であることが示唆された。
10. 国内民間分析機関によるシクロホスファミド拭き取り試験の包括的評価 (査読付)	共	2011年10月	医療薬学 37(10), 607 -610	濱宏仁, 杉浦伸一, 福嶋浩一, 吉田仁, 橋田亨. シクロホスファミドの拭き取り試験は、国外の研究所に主に委託されていたが、ワイプテストによる分析がコベルコ科研で開始された。当該機関と公的試験機関の分析の同等性の包括的な評価を行った。シクロホスファミドのワイプ試験から、誤差率および変動係数は目標範囲内であり、分析技術に差異はないと考えられた。
11.Verification of surface contamination of Japanese cyclophosphamide vials and an example of exposure by handling (査読付)	共	2011年	J Oncol Pharm Pract, 18(2), 201-206	Koji Hama, Koichi Fukushima, Masaki Hirabatake, Tohru Hashida, Kazusaburo Kataoka. 日本のシクロホスファミドバイアルの表面汚染を確認し、汚染があることが明らかになった。調剤した薬剤師の尿からシクロホスファミドが検出され、医療従事者がバイアルの取り扱いにより曝露していることが明らかになった。そのバイアルを洗浄することは、曝露防止に有効であると考えられた。
12. 抗がん薬バイアルと閉鎖式混合デバイス「PhaSeal(R)ソーラスTM」との適合性評価 (査読付)	共	2010年12月	医療薬学 36(12), 906 -912	福嶋浩一, 濱宏仁, 橋田亨. PhaSealクローズドシステムソーラスと41種類の抗がん薬の凍結乾燥製剤との適合性を調査した。無加圧条件下で、最大30回まで問題なかった。しかし、バイアルに加圧した際は針を5回挿入すると液漏れが発生した。ソーラスには26種類のバイアルは安全に使用できたが、漏れによる抗がん薬の曝露の可能性はまだ残っており、注意深く操作する必要がある。
13. 散剤秤量時の調剤環境が及ぼす調剤者曝露への影響－散剤抗がん薬調剤での意義 (査読付)	共	2010年11月	医療薬学, 36 (11), 796-801	相楽友香, 濱宏仁, 田中詳二, 橋田亨. 散剤調剤環境における集塵器の有効性を検討した。集塵機を低～中出力レベルで動作させることにより、散剤の飛散による抗がん薬の曝露を減らすことができることが考えられた。
14. 複数規格を有する抗がん剤の規格組み合わせ最適化プログラムの新規導入における費用対効果の検討 (査読付)	共	2010年06月	日本病院薬剤師会雑誌, 46(6), 804 -806	福嶋浩一, 平島正樹, 北田徳昭, 濱宏仁, 橋田亨. 規格の組み合わせ最適化自動プログラムの導入されていないオーダーリングシステムに、その最適化プログラムを導入した場合の費用対効果を検証した。システムにより完全に最適化した場合の薬剤費節減効果は、372万円/年であり、システム導入が有用と考えられた。
15. 外来がん化学療法における疑義照会事例の解析 併用内服薬を含めた処方鑑査による有害事象の回避 (査読付)	共	2010年06月	医薬品情報学, 11, 163-160	赤瀬博文, 濱宏仁, 平島正樹, 大音三枝子, 片岡和三郎, 橋田亨. 注射剤の癌化学療法では内服薬も頻りに処方されるが、内服薬の処方ミスが散見される。疑義照会事例を分析し、癌化学療法に処方された併用内服薬チェックの重要性を確認した。内服処方、前投薬、副作用軽減のための内服薬、経口抗がん剤の3つのタイプに分類され、副作用軽減の支持療法剤が処方ミスで最も多かった。併用内服薬確認の重要性が確認された。
16. Investigation on residual-related error and the	共	2010年	J Oncol Pharm Pract., 17(1), 55-60	Koji Hama, Noriaki Kitada, Koichi Fukushima, Tohru Hashida, Kazusaburo Kataoka. PhaSeal、Chemo CLAVE、Chemo Mini Spikeの3つのデバイスを日本では抗がん薬の溶解に使用できる。少ない調

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
effect of solution properties using protective devices for the reconstitution of cytotoxic agents in actual				製量では、デバイス内の残存する液量によって影響される場合があるため、その誤差を調べて比較した。水溶性薬物では、PhaSealの残留量は最も低かったが、粘性薬物では、PhaSeal=Chemo CLAVEであった。デバイスの残存量は、溶液の特性の影響を受けた。
17. 微生物学的見地による抗がん剤バイアル製剤の分割使用の検討と診療報酬算定方法に基づいた薬剤経費削減効果の試算（査読付）	共	2009年1月	医療薬学, 35(1), 57-63	濱宏仁, 黒川学, 片岡和二郎. 抗がん剤バイアルの残液使用を前提に5製剤について保存効力試験を行った。エトポシド, パクリタキセル, シスプラチン, カルボプラチンでは, 微生物接種後の生菌数が減少したが, イリノテカン, ビノレルビンでは一部の真菌で増殖が見られた。抗菌性を有する抗がん剤が明らかになった。残液を再利用した場合の医療費削減効果は, 1調製あたり2,549円であり, 残液使用が可能な抗がん薬の再使用による薬剤費削減が示唆された。
18. 調製支援情報による抗がん剤調製過誤対策の導入—注射薬調製ラベルを利用したシステムの開発—（査読付）	共	2008年4月	医療薬学, 34(4), 328-332	平島正樹, 濱宏仁, 山本健児, 赤瀬博文, 大音三枝子, 田村昌三, 片岡和二郎. 外来がんの化学療法の無菌調製業務で, 調製情報を提供する最善の方法を検討し, 調製ラベルに情報を表示し, 調製エラーを評価した。薬剤調製ラベルに表示される情報は, 抗がん剤調製における間違いリスクを軽減する有効な手段であった。
19. 外来がん化学療法における処方疑義照会の解析（査読付）	共	2006年8月	医療薬学, 32(8), 816-823	濱宏仁, 平島正樹, 田村昌三, 岩森繁夫, 片岡和二郎. 外来がん化学療法の処方に関する調査を実施し, 疑義照会の内容を詳細に検討したところ, プロトコールと処方の確認, 投薬歴管理と有効性に関する処方をチェック, 薬剤師の専門知識に基づく処方をチェックが必要で, とくに投薬管理が重要であると考えられた。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. Prevention of Occupational Exposure on Handling of Cytotoxic Drugs in Japan		2012. 6.	The 10th China-Japan-Korea Joint Symposium for Clinical Information on Parenteral Drugs	Koji Hama, Tohru Hashida. シクロホスファミドのバイアル表面かの30-60%から抗がん薬汚染が検出され, 医療従事者の日常的な曝露が明らかになった。製薬メーカーは汚染防止策を講じるべきで, 医療従事者は, 曝露対策を取るべきである。
2. Evaluation of Using Residual Anticancer Agents Based on Microbiological Considerations		2009. 4.	The 8th Japan-Korea Joint Symposium for Clinical Information on Parenteral Drugs	Koji Hama, Kazusaburo Kataoka. 抗がん剤バイアルの残液使用を前提に5製剤について保存効力試験を行った。イリノテカン, ビノレルビンでは一部の真菌で増殖が見られたが, エトポシド, パクリタキセル, シスプラチン, カルボプラチンでは, 微生物接種後の生菌数が減少した。残液を再利用した場合の医療費削減効果は, 589万円/年であり, エトポシド, パクリタキセル, シスプラチン, カルボプラチンの残液使用が可能で, 薬剤費削減が示唆された。
<b>2. 学会発表</b>				
1. インスリンアスパルトの振とう環境下での安定性について	共	2023年9月	第11回日本くすりとう糖尿病学会学術集会	インスリンアスパルト（超速効型インスリン）における、振とう環境下の安定性を評価した。室温で180rpm、4時間の振とう条件下では、14日間で、振とう環境は、カートリッジに含まれるインスリン量に影響を与えないことが示唆された。
2. 文献調査によるがん化学療法患者が望む治療説明と薬剤師の説明の違いの問題点の探求	共	2023年6月	第15回日本がん薬剤学会学術大会	文献調査を行い、がん化学療法において「患者が望む治療説明」をしてほしい項目の効能・効果、投与計画、副作用とその対策、日常生活での注意点、相互作用、医療費の6項目のうち、「薬剤師が実施している患者説明」では、文献上からは医療費の説明は実施されていないという問題点が明らかになった。
3. 兵庫県下の病院施設における新人薬剤師の卒後研修に関する現状調査	共	2023年2月	近畿薬剤師会学術大会2023、(第25回近畿薬剤師学術大会・第44回日本病院薬剤師会近畿学術大会)Web	兵庫県病院薬剤師会におけるプログラムに沿った新人薬剤師の卒後研修の現状を把握のアンケート調査を行った。病床数が多いほど、薬学実務実習受入及びレジデント制度ありの施設の実施率は高かった。問題点として「慢性的な人員不足」「指導者側に時間がない」を挙げた。施設間で差が大きく、共通プログラムに沿った研修が行えるよう病院薬剤師会として体制を整備していきたい。
4. オゾンガスによる抗がん剤分解効果の検証	共	2022年9月	第32回日本医療薬学会年会、高崎	シクロホスファミドに対し10 ppmのオゾンガスを48時間曝露させた場合の抗がん剤分解効果を検証した。分解効果が認められたものの、湯ぐれた効果ほどではなく、安全域とされる0.1 ppmでの使用を

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
5. 病院実務実習に関するアンケート調査より解析されたコロナ禍の影響	単	2021年10月	第31回日本医療薬学会年会	見据えた全試験であったが、オゾンガス濃度の安全域での抗がん剤分解効果の実用化は難しいことが判明した。
6. Drug Vial Optimization導入のための使用期限設定に関する考察	共	2021年10月	第31回日本医療薬学会年会	実務実習終了時に毎年実施しているアンケートから理解度、満足度がコロナ禍でどのように変化したのかを調査した。病棟に関連する業務が優位に減少しており、それらを補強する実習内容が求められると考えられた。
7. 遮光性を有する袋による医薬品の保管における問題点の考察	共	2021年10月	第31回日本医療薬学会年会	Dug vial optimization (DVO) の導入により、分割使用の使用期限内に使い切れない場合は医療施設側の廃棄薬剤費の負担が生じる。試算により使用期限は1~2 日では必ず廃棄が発生し、7日以上で大部分の廃棄がなくなることが示された。経済的損失を伴わない条件で医療施設でDVO を導入するためには、使用期限延長の検討が望まれる。
8. Drug Vial Optimization導入のための使用期限設定に関する考察～ベバシズマブでの検討～	共	2021年5月	第13回 日本がん薬剤学会学術大会	曝光変化を生ずる医薬品を遮光袋等に入れ、保管時の安定性について検討した。遮光率70.0~98.5%の袋に入れて長期保管することは不相当と考えられた。遮光率100%の袋での長期保管は、曝光から保護されることが明らかとなった。ほとんど光を通さない遮光袋であっても、曝光により変化が生ずる医薬品を遮光袋を用いて保管する場合には、完全な遮光条件が望ましいと考えられた。
9. 薬袋の遮光性の違いによる有効成分量の低下防止効果についての検証		2020年10月	第30回 日本医療薬学会年会	抗がん剤パイアルの残液の分割使用(DVO)は、ガイドラインでは当日内に使い切るとされており、使い切れなければ廃棄薬剤費の負担が生じる。そこで、アバスチンを指標に廃棄しないですむDVOの使用期限のあり方を調査した。使用期限は2日以内で必ず廃棄、7日以上で廃棄が無くなった。使用期限が1日の現状では、DVOの導入は医療施設の立場では難しいことが明らかとなった。
10. インスリングラルギンの高温下および非遮光下における安定性に関する検討		2020年10月	第30回 日本医療薬学会年会	要遮光薬のセバミットR細粒10mg分包により、白色/桃色/内側黒色薬袋/濃褐色遮光袋の要遮光薬の有効成分量の低下防止効果を検証した。アルミ包装は有効成分量の低下はなかったが、白色/桃色薬袋は低下したため、遮光率が83%（桃色薬袋）以下の薬袋は保管条件として不適当で、遮光率99%の内側黒色薬袋、濃褐色遮光袋は、保管に有用と考えられた。
11. 改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムに準拠した病院実務実習における実習生の理解度および満足度に関するアンケート解析	共	2020年10月	第30回 日本医療薬学会年会	インスリングラルギンを35℃遮光および非遮光条件の安定性を検討した。試料溶液（ピーク下面積1）に対し、35℃（遮光）24時間後までのグラルギンのピーク下面積は1と同程度であったが、7日目0.94、14日目0.96と低下がみられた。非遮光試験では、120分まで概ね1付近であった。35℃、24時間を超える場合には何らかの対応が必要と思われた。
12. 要遮光医薬品の保管状況の実態と遮光保管に関する検討	共	2020年02月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会、神戸	実務実習生を対象としたアンケート調査と指導薬剤師の評価に基づき、学生自身が実習の内容や意義を理解し、満足できる実務実習を実施するための要因解析を行った。
13. Singledose-vial（単回使用バイアル）穿刺後の残液分割使用における安全性の検討	単	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会，神戸	要遮光医薬品の患者居宅での保管状況について、84%の患者は居宅で医薬品の光からの保護を意識的に行っていなかった。照度測定の結果、各薬袋での保管は一定の遮光効果があるものの完全遮光性はなく、筆者らが作成した黒色着色袋では遮光効果が認められた。医薬品の保管状況に応じた曝光による影響についての一つの指標となった。
14. 分娩後の予防的メチルエルゴ目とリンおよび抗菌薬内服投与の廃止に伴う影響の	共	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会，神戸	濱宏仁。Singledose vial残液の分割使用では、ゴム栓上に微生物が付着した場合には、穿刺時に微生物がバイアル内に混入する可能性があることが示唆され、Singledose vial穿刺後の残液分割使用は、CSTDの使用の有無に関係なく、少なくともバイアルの穿刺部位をクリーンな状態に維持できなければ、バイアル内への微生物の混入が起りうるということが確認された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
有無に関する検討				
15. $\beta$ 2 受容体刺激吸入薬に起因する低カリウム血症についての調査	共	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会，神戸	山崎彬史、濱宏仁、中浴伸二、森本茂文. $\beta$ 2 受容体刺激吸入薬使用患者で低K血症を発症した患者を調査した. フェノテロールの過量吸入による症例報告
16. カルボプラチン-アルブミン結合パクリタキセル療法におけるアプレピタント投与の有無による制吐効果への影響	共	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会，神戸	西村 亮、中西 真也、吉野 新太郎、原田 卓弥、中浴 伸二、濱 宏仁、森本 茂文. カルボプラチンは海外制吐GLでは高度催吐性リスクに分類されている。進行NSCLCの一次治療のCBDCA-nab-PTX療法で、APR投与の有無について検討したところ、APR投与は個別での検討が必要と考えられた。
17. パンコマイシン「MEEK」TDM解析ソフトにおける血清クレアチニン値補正による予測性の検討	共	2018年02月	近畿薬剤師会同学術大会2018、京都	平野美優、公門法子、濱宏仁、田中詳二. パンコマイシン”MEEK”TDM解析ソフトで、SCr 0.6mg/dLへ補正することにおける予測性の検討を行った.”MEEK”使用時は、SCr0.6mg/dL時にSCr 0.6mg/dLへの補正を行わないほうが予測性が向上することが明らかになった。
18. オキシコドンの投与による便秘に対するルビプロストンの使用報告	共	2018年02月	近畿薬剤師会同学術大会2018、京都	渡邊瞭、濱宏仁、石本学司、田中詳二. 強オピオイド誘発性便秘に対しルビプロストンを使用した症例から、低用量オピオイドでは有効、高用量では難しいと考えられたが、既存薬無効例では検討も可能と考えられた。
19. 単回使用バイアルの分割使用を前提とした保管条件の違いによるバイアル内無菌性保持の検討	共	2018年01月	第40回日本病院薬剤師会近畿学術大会、奈良	濱 宏仁、森本茂文、分割使用時のバイアル保管条件について検討した。穿刺後のバイアル保管条件は、ISOクラス5が好ましいが、ゴム栓やCSTDがあればISOクラス8環境下でも無菌状態が7日間保持されることを明らかにした。
20. 抗がん薬調製用閉鎖システム 使用による曝露量減少効果の検証	共	2017年11月	第27回 日本医療薬学会年会、千葉	濱宏仁、成橋和正、杉浦伸一、中西弘和. 抗がん薬調製用閉鎖システムの曝露量減少効果の比較を行い検証した結果、調製操作時の曝露は、標準操作に比べ閉鎖システム使用で殆んど防止されることが確認された。閉鎖システムの CP 値がほぼ NDと均一なのに対し、標準操作では非常に大きなバラツキがあった。
21. 慢性便秘症治療薬ルビプロストンの適切な投与方法の検討	共	2017年11月	第27回 日本医療薬学会年会、千葉	渡辺 瞭、濱宏仁、田中 詳二. 慢性便秘症治療薬ルビプロストンの投与量、効果過剰時に発現すると考えられる下痢、腎機能との関連性を調査し、適切な投与方法について検討した。投与開始 1-2日以内の下痢の副作用評価が必要と考えられ、継続投与、減量又は増量の判断を行うべきと考えられた。
22. 早期症状緩和を目指したオピオイド回診における薬剤師の関わり	共	2017年11月	第27回 日本医療薬学会年会、千葉	藤原 歩、赤瀬 博文、濱宏仁、西尾 智尋、田中 詳二. オピオイド使用患者へのオピオイド回診の活動内容について後方視的に検討した。クリーニング方式でのオピオイド回診を行い各薬剤師間で情報共有・連携を図ることで、コンサルテーション方式では抽出できなかった事例にも介入でき、疼痛・諸症状の改善に貢献できたと考えられた。
23. 抗がん薬により意図的に表面汚染させたバイアルの水、次亜塩素酸ナトリウム及びオゾン水による簡易洗浄法を用いた除染効果の検証	共	2017年07月	医療薬学フォーラム 2017 /第25回クリニカルファーマシーシンポジウム、鹿児島	濱宏仁、成橋和正、杉浦伸一、中西弘和. バイアル表面の抗がん薬の簡易洗浄法を用いた除染効果を検証した。バイアルを水道水、次亜塩素酸ナトリウムまたはオゾン水に浸漬後、流水またはオゾン水で洗浄した。抗がん薬除染量からの観点では、洗浄条件の違いによる除染効果に差はなく、抗がん薬のバイアル表面から検出されている低レベルの汚染量は、簡易洗浄法で除去ができることが示唆された。
24. 「おくすり確認外来」運用開始による入院日の抗凝固薬等の休薬状況に対する影響	共	2017年02月	第 38 回日本病院薬剤師会近畿学術大会、大阪	酒井麻衣、石本学司、濱宏仁、田中詳二. 手術入院前の薬剤師による常用薬の事前把握と休薬の必要な薬の医師への情報提供のおくすり確認外来の改善点を検討した。開始前後で適正に事前休薬できていなかった患者数に有意差はみられず、医師への伝達方法の確立や患者の理解をより高める必要性が考えられた。
25. ワルファリンとトラマドール併用による血液凝固能の変動に関する検討	共	2017年02月	第 38 回日本病院薬剤師会近畿学術大会、大阪	光武瑞穂、赤瀬博文、濱宏仁、田中詳二. トラマドール併用時のワルファリンの血液凝固能の変動について検討した。極端なPT-INR値の変動症例はなく、血液凝固能のモニタリングを適切に実施していれば対応可能と考えられた。
26. ポリファーマシーが飲み忘れに与える影	共	2017年02月	第 38 回日本病院薬剤師会近畿学術	加藤早希、濱宏仁、田中詳二. ポリファーマシーが飲み忘れに与える影響について検討した。服用品目数6剤以上で飲み忘れに影響を

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
響			大会、大阪	及ぼすことが明らかとなった。一包化により飲み忘れが改善することが推察された。
27. 睡眠導入剤使用による転倒・転落のリスクの検討	共	2017年02月	第38回日本病院薬剤師会近畿学術大会、大阪	平野 美優、濱宏仁、田中詳二。睡眠導入剤の転倒・転落のリスクについて検討した。転倒率は、ラルメテオンで高く、非ベンゾジアゼピン系薬との併用で増強される可能性が示唆された。超短時間型薬剤で転倒率が高かった。
28. 医療上必要な薬剤の市販化に向けた調査・研究	共	2016年09月	第26回日本医療薬学会年会、京都	渡辺享平、後藤伸之、佐々木忠徳、濱宏仁、原田幸子、松浦克彦、山川雅之。「抗がん剤廃棄量減少に向けた医療薬学的アプローチの検討」の実態調査を踏まえ、わが国における分割使用を可能とする無菌環境の基準や分割使用を目的とした閉鎖式接続器具の定義が存在しないという根本的問題点に加え、現行の保険医療制度上の取り扱いとの乖離などの問題点を明らかにすることができた。
29. アンジオテンシンII受容体拮抗薬の術中血圧への影響への検討	共	2016年09月	第26回日本医療薬学会年会、京都	平野美優、濱宏仁、田中詳二。アンジオテンシンII受容体拮抗薬(ARB)の術中血圧への影響を検討した。ARBの術中血圧への影響はみられないと考えられたが、既報では休業、継続すべきとの結果に分かれ、ARB使用で昇圧剤の効果が減弱するとの報告もあり、ARBの手術当日内服中止は患者ごとに検討する必要があると考えられた
30. エキセナチド(ビデュリオンR)皮下注用ペンの溶解操作による薬液詰まりの検証	共	2016年09月	第26回日本医療薬学会年会、京都	加藤早希、濱宏仁、田中詳二。エキセナチド皮下注ペン溶解操作後の薬液詰まりの要因について検証した。薬液の混合から注入の間に2分以上放置、又は低温状態での溶解操作で溶解が不十分になることが明らかになった。n=1の検証だが、ペン先を下に向けた場合、溶解が不十分で生じた粘稠性の薬液が仮に針内に留まった場合には薬液詰まりに繋がると考えられた。
31. 病棟薬剤業務に携わる配置人員増がもたらした薬剤適正使用への影響と費用対効果	共	2016年01月	第37回 日本病院薬剤師会近畿学術大会、神戸	奥貞佳奈子、橋本勝、赤瀬博文、公門法子、濱宏仁、田中詳二。病棟薬剤業務の開始に伴う薬剤適正使用、費用対効果について評価を行った。病棟の実配置日数の増加からプレアポイド、処方提案が増加し、薬剤管理指導による増収にも結びつくことが示された。
32. 早期からの疼痛緩和を目的としたオピオイド回診の有用性に関する検討	共	2016年01月	第37回 日本病院薬剤師会近畿学術大会、神戸	吉井遼、赤瀬博文、櫻井晴奈、藤原歩、嶋本藍、濱宏仁、田中詳二。オピオイド使用患者をスクリーニングし、オピオイド回診した有用性の検討を行った。従来のコンサルテーション方式では対処できない症状改善効果があり、疼痛成績向上に有用であった。
33. 禁煙補助薬バレニクリンの副作用と禁煙継続への影響	共	2016年01月	第37回 日本病院薬剤師会近畿学術大会、神戸	櫻井晴奈、石本学司、濱宏仁、富岡洋海、田中詳二。禁煙補助薬バレニクリンによる副作用と禁煙治療に与える影響について検討した。副作用発現が治療中断と関連していないこと、副作用対策を行えば、禁煙治療中断の原因には繋がりにくいことが示唆された。
34. 病棟常駐薬剤師によるTDM業務実施の取り組みと効果	共	2016年01月	第37回 日本病院薬剤師会近畿学術大会、神戸	高橋亜里紗、公門法子、赤瀬博文、濱宏仁、田中詳二。病棟常駐薬剤師によるTDM業務実施の効果について検討した。その対象患者やその状態を把握しやすいため、TDM実施件数の増加につながり、病棟常駐薬剤師と医師・看護師との連携が速やかに図れるためと考えられた。
35. 当院における高齢者のafatinibの投与量と副作用に関する検討	共	2016年01月	第37回 日本病院薬剤師会近畿学術大会、神戸	藤原歩、赤瀬博文、濱宏仁、田中詳二。高齢者のafatinibの投与量と副作用を検討した。下痢の副作用は、用量依存的に発現頻度と重症度が増大する傾向が示唆された。
36. オゾン水および次亜塩素酸ナトリウムを用いた抗がん薬汚染環境の除染効果	共	2015年11月	第25回医療薬学会年会、横浜	濱宏仁、田中詳二、橋田亨。オゾン水と次亜塩素酸ナトリウムでの除染効果を評価した。NaOH、オゾン水、次亜塩素酸ナトリウムのいずれも抗腫瘍薬の除染が可能であることが示唆された。さらに、抗腫瘍薬はオゾン水および次亜塩素酸ナトリウムを用いた拭き取りで汚染除去が可能であった。
37. 医療現場における抗がん剤廃棄の現状とその経済的損失に関する調査研究	共	2015年11月	第25回医療薬学会年会、横浜	元山暉、大津史子、佐々木忠徳、濱宏仁、原田幸子、松浦克彦、山川雅之、渡辺享平、後藤伸之。経済的観点から抗がん剤の廃棄の現状と対応を目的に全国規模の抗がん剤調製の実態調査を行った。抗がん剤廃棄量とその経済的損失は大きいと考えられ、適切な規格製剤の導入は廃棄量削減に有効であるといえる。
38. 医療現場に必要な薬剤の市販化に向けた調査・研究	共	2015年11月	第25回医療薬学会年会、横浜	渡辺享平、後藤伸之、佐々木忠徳、濱宏仁、原田幸子、松浦克彦、山川雅之。学術第4小委員会の活動により、フェノトリン、メトロニダゾール外用剤の市販化が達成された。新たな市販化アンケート調査により要望をまとめ、抗がん剤廃棄量に関する全国実態調査を行

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
39. タクロリムスカプセル過量内服の1症例	共	2015年08月	第18回近畿薬剤師学会大会、神戸	い、総廃棄量金額が高額であることが明らかとなった。酒井麻衣、石本学司、濱宏仁、田中詳二。タクロリムスの過量内服の症例を経験した。過量服用後1時間以上経過で胃洗浄を行い、補液を行った。半減期は18時間であるが、血中濃度は早期に急激な低下がみられ、2相性で低下した可能性が考えられた。
40. 病院薬剤師を対象にした社会が必要とする薬剤の探索	共	2015年03月	日本薬学会第135年会、神戸	堀江美香子、大津史子、佐々木忠徳、濱宏仁、原田幸子、松浦克彦、山川雅之、渡部一宏、渡辺享平、政田幹夫、後藤伸之。病院薬剤師を対象にした社会が必要とする薬剤について調査を行った。
41. 輸液量と循環動態の変動によりバンコマイシンのトラフ値が変動した1例	共	2015年01月	第36回日本病院薬剤師会近畿学術大会、和歌山	高橋亜里紗、公門法子、嶋本藍、濱宏仁、田中詳二。同一患者でバンコマイシンの血中濃度予測が良好であった場合と不良であった場合を経験した。Scr低値、輸液量増加でバンコマイシンのクリアランスが急激に増加しトラフ値が低下したと考えられた。その後呼吸状態悪化、血圧低下による全身循環動態変動でクリアランスが低下しトラフ値が上昇したと考えられた。
42. NSAIDs投与に起因する出血性潰瘍の発症患者についての調査	共	2014年09月	第24回日本医療薬学会年会、名古屋	藤田仁美、濱宏仁、巽弥生、嶋本藍、福島昭二、新真理子、田中詳二。NSAIDsに起因する出血性胃潰瘍のリスク因子と関連性を調査した。リスク因子数が少ない症例や中程度でも出血性胃潰瘍は発症しており、その因子のみで副作用発現を予測することは適当でないことが明らかとなった。
43. アレンドロン酸ナトリウム錠およびテリパラチド皮下注投与によりALP高値を示した一症例	共	2014年09月	第24回日本医療薬学会年会、名古屋	櫻井晴奈、濱宏仁、石本学司、田中詳二。アレンドロン酸錠、テリパラチド皮下注でALP高値が疑われた照英を経験した。ALP上昇は骨折に起因したと考えられたが、骨折以降のALP上昇は薬剤性が疑われた。その上昇はアレンドロン酸が疑われた。
44. 注射用抗がん剤調製時に生じる余剰への対応に関する調査	共	2014年07月	第17回日本医薬品情報学会総会・学術大会、鹿児島	加藤麻理乃、渡辺享平、後藤伸之、久保田康生、佐々木忠徳、濱宏仁、政田幹夫、松浦克彦、山川雅之、渡部一宏。注射用抗がん剤調製時に生じる余剰への対応に関する各病院への調査を行った。
45. 食事のオピオイド追加投与により食事摂取が改善した一例	共	2014年06月	医療薬学フォーラム2014/第22回クリニカルファーマシーシンポジウム、東京	嶋本藍、濱宏仁、赤瀬博文、公門法子、田中詳二。疼痛コントロール不良患者で、食事の30分前にオピオイドの追加投与を行ったことにより、体動時の痛み改善から食事摂取が改善した一例を経験した。
46. 患者の立場からみた口腔内崩壊錠の有用性について	共	2014年06月	医療薬学フォーラム2014/第22回クリニカルファーマシーシンポジウム、東京	星川裕佳子、濱宏仁、吉田恵里、嶋本藍、藤井忍、福永理己郎、新田剛、田中詳二。口腔内崩壊錠(OD錠)服用患者への聞き取り調査から、多くの患者でOD錠の特長が有効利用されていないことが明らかとなり、積極的な情報提供の必要性を感じた。
47. 曝露対策の現状報告と課題	共	2014年05月	第6回JSOPP(日本がん薬剤学会)学術大会、東京	濱宏仁、田村昌三、田中詳二、平島正樹、中西真也、橋田亨。神戸市立の大規模病院と中小規模病院の2病院の抗がん剤曝露対策を対比し、その実態と課題を浮き彫りにした。
48. 間質性膀胱炎治療に関する実態調査	共	2014年03月	日本薬学会第134年会、熊本	知念晴香、渡辺享平、後藤伸之、久保田康生、佐々木忠徳、濱宏仁、政田幹夫、松浦克彦、山川雅之、渡部一宏。日本病院薬剤師会学術小委員会第4小委員会で行った。間質性膀胱炎治療に関する実態調査を報告した。
49. 電子カルテアレルギー歴情報抽出システムの構築と病棟薬剤業務への適用	共	2014年02月	第35回日本病院薬剤師会近畿学術大会、京都	橋口文乃、濱宏仁、樋口弘実、北田徳昭、政井栄久、橋田亨。電子カルテ情報からアレルギー歴を抽出し、一覧化する仕組みを構築し、その有用性を評価した。システム導入によりアレルギー関連の照会およびそれに伴う処方変更件数が増加し、情報が処方チェックに活用できたと考えられた。
50. 抗がん剤調製時における閉鎖系および開放系調製手技による環境汚染への影響	共	2013年01月	第34回日本病院薬剤師会近畿学術大会、大津	光武瑞穂、濱宏仁、平島正樹、橋田亨。抗がん剤調製で閉鎖系で調製しているシクロホスファミドとインフューザー使用時に開放系で調製している5-FUを指標に無菌調製室内の汚染を調査した。同じ拭き取り検体からシクロホスファミドは検出されず5-FUが検出され、閉鎖系手技が不完全であれば環境汚染が生じることが示唆された。
51. 抗がん剤側管投与時の生理食塩水充填輸液ライン内抗がん剤汚染による曝露防止	共	2012年10月	第50回日本癌治療学会学術集会、横浜	中西真也、平島正樹、濱宏仁、濱田麻美子、佐藤杏子、難波亜衣子、辻晃仁、杉浦伸一、中西弘和、橋田亨。閉鎖式デバイスを使用しプライミングを行い、抗がん剤のライン内移動について赤色蛍光塗料の移動で検証したところ、プライミングを行った後にも

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
の検討				
52. 抗がん薬調製時の包括的曝露防止策導入と環境拭き取り試験によるその評価	共	2012年07月	医療薬学フォーラム2012/第20回クリニカルファーマシーシンポジウム、福岡	抗がん薬混合後の長時間放置による曝露の可能性が生じることが判明した。 光武瑞穂、濱宏仁、平島正樹、橋田亨. シクロホスファミドを指標とした調製環境調査により、汚染対策の有用性を評価した。バイアル洗浄導入により汚染減少を示したことからそれまでの環境汚染はバイアル汚染に起因したと考えられた。
53. 抗がん薬注射バイアル調製時のクローズドシステムと金属針の使用に起因する微生物学的汚染の検討	共	2012年03月	日本薬学会第132年会、札幌	濱宏仁、橋田亨、片岡和三郎. 閉鎖系システムと金属針による汚染を評価するため、Bacillus subtilisを塗布し、微生物汚染レベルを比較した。バイアルが細菌汚染の影響を受けやすい調製条件下でPhaSealを複数回使用した場合、それは微生物汚染の点で最大5回の穿刺で金属針とほぼ同等であることが示唆された。
54. 東日本大震災の被災地に対する医療支援と薬剤師の役割—救護所の設営から撤収まで—	共	2011年10月	第21回日本医療薬学会年会、神戸	中浴伸二、田村昌三、北田徳昭、奥貞智、稲角利彦、濱宏仁、平島正樹、登佳寿子、山本健児、田中詳二、有吉孝一、橋田亨. 東日本大震災の被災地の継続的な医療支援における救護所の開設から撤収までを報告し、災害医療時の薬剤師の役割を明らかにした。
55. 拭き取り試験によるシクロホスファミドバイアル製剤の表面汚染の検証	共	2011年03月	第131回日本薬学会年会、静岡	濱宏仁、橋田亨、片岡和三郎. シクロホスファミドバイアルの表面の拭き取り試験を行った。対象の全てのロットから汚染が認められ、30-60%であった。バイアルに起因する曝露の可能性が示唆された。
56. シクロホスファミドバイアル製剤の計数調剤における職業的曝露の可能性	共	2010年10月	第20回日本医療薬学会年会、千葉.	濱宏仁、平島正樹、福嶋浩一、橋田亨. シクロホスファミドバイアルの表面汚染の調査と取り扱った薬剤師の尿を測定した。バイアル表面汚染が認められ、取り扱った薬剤師の尿からも検出された。バイアル汚染は洗浄により除去されることも明らかとなった。
57. 調剤抗がん薬の調剤環境が及ぼす調剤者への曝露の検討	共	2010年01月	第31回日本病院薬剤師会近畿学術大会、京都	相楽友香、濱宏仁、田中詳二、橋田亨. 散剤調剤環境における集塵器の有効性を検討した。集塵機を低～中出力レベルで動作させることにより、散剤の飛散による抗がん薬の曝露を減らすことができることが考えられた。調剤時のマスクにも飛散が確認された。
58. 当院における手術室薬品管理の運用改善の取り組み	共	2009年11月	第48回全国自治体病院学会、川崎	松岡勇作、濱宏仁、福嶋浩一、稲角利彦、田中詳二、橋田亨. 手術時に使用する麻酔科医師使用薬のセットを看護師が定数から準備していたものを、予め薬剤師がトレイにセットし交換する方式を導入し、安全性が向上した。
59. 各種抗がん剤調製デバイスへの残存誤差の検証	共	2009年10月	第19回日本医療薬学会年会、長崎	濱宏仁、福嶋浩一、片岡和三郎、橋田亨. 抗がん剤調整用デバイスの3製品で残存誤差の検証を行った。水溶性薬物では、PhaSealの残留量は最も低かったが、粘性薬物では、PhaSeal=Chemo CLAVEであった。デバイスの残存量は、溶液の特性の影響を受けた。
60. 抗がん剤汚染リスクに関する看護師対象の研修会の実施とその意識調査	共	2009年01月	第30回日本病院薬剤師会近畿学術大会、大阪	巽弥生、平島正樹、大音三枝子、赤瀬博文、田村昌三、濱宏仁、楠由美子、中野悦子、橋田亨. 抗がん剤汚染に対する看護師対象の研修会を行い、アンケート調査を実施した。16%以上もの看護師が抗がん剤曝露の可能性のあることを知らずに業務を行っており、本格的な防護対策については取られていない現状を明らかにした。
61. 抗がん剤使用による悪心・嘔吐に対する院内制吐剤使用ガイドラインの検討	共	2009年01月	第30回日本病院薬剤師会近畿学術大会、大阪	高瀬友貴、平島正樹、田村昌三、濱宏仁、大音三枝子、赤瀬博文、福嶋浩一、巽弥生、橋田亨. 抗がん剤使用による悪心・嘔吐に対する院内処方統一が図られるべく院内制吐剤使用ガイドラインの検討を行った。
62. 抗がん剤バイアル製剤の分割使用の検討とその薬剤経費削減効果	共	2008年9月	第18回日本医療薬学会年会、札幌	濱宏仁、黒川学、片岡和三郎、橋田亨. 抗がん剤バイアルの残液使用を前提に5製剤について保存効力試験を行った。エトポシド、パクリタキセル、シスプラチン、カルボプラチンでは、微生物接種後の生菌数が減少したが、イリノテカン、ピノレルピンでは一部の真菌で増殖が見られた。抗菌性を有する抗がん剤が明らかになった。残液を再利用した場合の医療費削減効果は、1調製あたり2,549円であり、残液使用が可能な抗がん薬の再使用による薬剤費削減が示唆された。
63. 外来がん化学療法における注射剤規格選択の適正化による経済効果	共	2008年9月	第18回日本医療薬学会年会、札幌	福嶋浩一、濱宏仁、巽弥生、公門法子、稲角利彦、大音三枝子、田村昌三、赤瀬博文、平島正樹、橋田亨. 外来がん化学療法における注射剤規格選択の適正化による経済効果を検討し、医療経済の観点から疑義照会による適正化が欠かせない金額であることを明らかにし、規格選択最適プログラム導入における費用対効果を明らかにし

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
64. エノシタピンの簡便な溶解方法の導入	共	2008年2月	第29回日本病院薬剤師会近畿学術大会, 奈良	福嶋浩一, 平島正樹, 濱宏仁, 片岡和二郎. 煩雑なエノシタピン溶解操作において, 恒温振盪器を用いることで簡便に確実に溶解できその有用性を明らかにした.
65. 抗がん剤注射剤のMulti-use化の検討ーエトポシド注における検討ー	共	2007年9月	第17回日本医療薬学会年会, 前橋	濱宏仁, 田村昌三, 福嶋浩一, 赤瀬博文, 平島正樹, 大音三枝子, 片岡和二郎. 抗がん剤注射剤のMulti-use化の検討をエトポシド注で行った. Antimicrobial effectiveness testing実施により2週間までの再利用とコスト削減が可能と結論づけた.
66. がん化学療法無菌混合調製業務に問題点とその解決策ー血液内科がん化学療法における取り組みー	共	2007年9月	第17回日本医療薬学会年会, 前橋	平島正樹, 濱宏仁, 田中詳二, 片岡和二郎. 血液内科病棟の抗がん薬調製の問題点と解決策を検討した. 配合変化の回避, 調製方法や処方鑑査の時間短縮の方策により効率的な調製業務が可能となった.
67. がん化学療法点滴治療における併用内服薬に関する疑義照会事例の検討	共	2007年9月	第17回日本医療薬学会年会, 前橋	赤瀬博文, 濱宏仁, 平島正樹, 大音三枝子, 田村昌三, 片岡和二郎. 注射薬の処方鑑査であっても併用内服薬に関する疑義照会は重要であることを外来化学療法で明らかとしているが, 入院での事例でも同様であることが明らかとなった.
68. エノシタピンの溶解方法の検討	共	2007年9月	第46回全国自治体病院学会, 札幌	大音三枝子, 平島正樹, 濱宏仁, 片岡和二郎. エノシタピン溶解操作において, いろいろな溶解条件を検討し, 最適な条件を検討した.
69. 注射情報システムにおけるオーダリングデータインポートシステムの開発について	共	2007年9月	第46回全国自治体病院学会, 札幌	山本健児, 濱宏仁, 田中詳二, 岩森繁夫, 妻木邦彰, 片岡和二郎. 抗がん剤調製業務で独自に開発した注射情報システムについて, そのデータ入力するにあたりオーダリングデータをインポートすることで簡便に入力できるシステムを開発した.
70. 薬学6年制学生実習への問題点ー実務実習モデル・コアカリキュラムの試験導入からの考察ー	共	2007年7月	医療薬学フォーラム, 2007年7月, 山形	濱宏仁, 巽弥生, 福嶋浩一, 山本健児, 稲角利彦, 奥貞智, 片岡和二郎. 薬学6年制学生実習を見据えて, 実務実習モデル・コアカリキュラムの試験導入を1か月実習に導入し今後の問題点を考察した. 共用試験レベルの設定重要で, 病院薬剤師のみの取り組みでは限界があることを実感した.
71. ベルテボルフィン注射薬調製業務の取り組み	共	2007年7月	医療薬学フォーラム, 2007年7月, 山形	大音三枝子, 濱宏仁, 平島正樹, 赤瀬博文, 田村昌三, 片岡和二郎. 加齢黄斑変性症の治療のベルテボルフィン注射薬調製の細胞毒性と高価であることから慎重な調製が求められるため, 調製業務を開始した際の取り組みについて報告した.
72. Risk reduction in cancer chemotherapy - Importance of a system for checking prescriptions for oral agents in drip infusion therapy -	共	2007年4月	The 6th Korea-Japan Joint Symposium for Clinical Information on Parenteral Drugs, Koriyama	Hirofumi Akase, Koji Hama, Masaki Hirabatake, Mieko Ohto, Shozo Tamura, Kazusaburo Kataoka. 外来化学療法は点滴注射薬での治療であるが, その処方鑑査であっても併用内服薬に関する処方を鑑査によって疑義照会し処方変更された事例が多く併用内服薬処方鑑査が重要であることを報告した.
73. 当院での学生実習への「実務実習モデル・コアカリキュラム」の導入とその問題点	共	2007年3月	日本薬学会第127年会, 富山	奥貞智, 濱宏仁, 稲角利彦, 山本健児, 公門法子, 福嶋浩一, 巽弥生, 片岡和二郎. 今後導入予定である学生実習への実務実習モデル・コアカリキュラム導入における問題点を考察した.
74. 新入局薬剤師の調剤研修方法の試みーモデル・コアカリキュラムに基づいた学生実務実習指導への関与ー	共	2007年1月	第28回日本病院薬剤師会近畿学術大会, 神戸	奥貞智, 濱宏仁, 稲角利彦, 山本健児, 公門法子, 福嶋浩一, 巽弥生, 片岡和二郎. 今後導入予定である学生実習への実務実習モデル・コアカリキュラム導入における問題点を考察した.
75. 調製ラベルを利用したがん化学療法における調製時リスクの回避について	共	2006年10月	第45回全国自治体病院学会, 鹿児島	大音三枝子, 濱宏仁, 山本健児, 平島正樹, 田村昌三, 岩森繁夫, 片岡和二郎. がん化学療法における調製者が必要とする情報を全て調製ラベルに印字することで, 調製ミスに繋がるリスクの回避が可能となった.
76. 外来がん化学療法に	共	2006年9月	第16回日本医療薬	濱宏仁, 平島正樹, 田村昌三, 赤瀬博文, 公門法子, 大音三枝子, 岩森繁

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
おける処方疑義照会の解析 その2－開始初年と2年目の比較－			学会年会、金沢	夫,片岡和二郎. 外来がん化学療法の調製業務開始1年目に明らかにした処方チェックポイントについて, 2年目の処方疑義照会を解析し, プロトコールによる処方鑑査の重要性, 患者情報に基づくチェックの必要性の一層の高まりが伺えた
77. Attempt of the risk aversion with the preparation label for the injection	共	2006年7月	The 5th Korea-Japan Joint Symposium for Clinical Information on Parenteral Drugs, Korea	Koji Hama, Kenji Yamamoto, Masaki Hirabatake, Shozo Tamura, Shigeo Iwamori, Kazusaburo Kataoka. 抗がん剤無菌調製業務の処方鑑査でMicrosoft Accessを用いた独自の注射薬情報システムを構築しその情報を調製用ラベルに印字させたことにより, 調製スキルが未熟であっても処方の自己チェックができ安全に調製が可能となった.
78. アントラサイクリン系抗がん剤の累積投与限界量超過を回避できた2症例	共	2006年7月	医療薬学フォーラム2006/第14回クリニカルファーマシーシンポジウム, 大阪	平島正樹, 濱宏仁, 田村昌三, 岩森繁夫, 片岡和二郎. 看護師からの情報をデータベースシステムに登録し活用することで回避できたアントラサイクリン系抗がん剤の累積投与限界量超過の2症例を報告した
79. 腎不全用高カロリー輸液の院内製剤化とその有用性	共	2005年10月	第15回医療薬学会年会, 岡山	濱宏仁, 田村昌三, 平島正樹, 岩森繁夫, 喜田勝也, 片岡和二郎. 腎不全用高カロリー輸液の院内製剤化を行い, その安定性, 廃棄率, 病棟での看護師が混合する高カロリー注射薬抽出量の低下から有用であることを報告した.
80. 外来がん化学療法における処方疑義照会の解析	共	2005年7月	医療薬学フォーラム2005/第13回クリニカルファーマシーシンポジウム, 鹿児島	濱宏仁, 平島正樹, 田村昌三, 岩森繁夫, 片岡和二郎. 外来がん化学療法における処方疑義照会・プレアポイドを解析し, プロトコールに基づく処方鑑査, 薬歴に基づく処方鑑査, 配合変化の処方鑑査の重要性が明らかになり, それらを処方チェックポイントとすることを申し合わせた.
<b>3. 総説</b>				
1. 米国薬局方からみた日本の抗がん薬曝露対策		2016年10月	第26回日本医療薬学会年会、京都	濱宏仁. 米国薬局方800章から考えられる日本の曝露対策の方向性とCSTDの最新の知見について解説した.
2. 平成26年度学術委員会学術第4小委員会報告 医療現場に必要な薬剤の市販化に向けた調査・研究 (最終報告)	共	2015年9月	日本病院薬剤師会雑誌, 51(9), 1057-1059	渡辺 享平, 佐々木 忠徳, 濱宏仁, 原田 幸子, 松浦 克彦, 山川 雅之, 後藤 伸之. 社会が必要とする薬剤の市販化要望に関する調査結果から, 市販化を望む薬剤が明らかになり, 本委員会が検討すべき薬剤に関する有用な情報を得ることができた.
3. 平成25年度学術委員会学術第4小委員会報告 医療現場に必要な薬剤の市販化に向けた調査・研究	共	2014年8月	日本病院薬剤師会雑誌, 50(8), 947-949, 2014.	渡辺 享平, 久保田 康生, 後藤 伸之, 佐々木 忠徳, 濱宏仁, 政田 幹夫, 松浦 克彦, 山川 雅之, 渡部 一宏. 25年度に作成した社会が必要とする薬剤の市販化要望に関する調査のアンケート案を26年度には完成させ, 全国の声を集約するためアンケートを開始予定である.
4. 平成24年度学術委員会学術第4小委員会報告 医療現場に必要な薬剤の市販化に向けた調査・研究	共	2013年8月	日本病院薬剤師会雑誌, 49(8), 800-802	渡辺 享平, 久保田 康生, 後藤 伸之, 佐々木 忠徳, 濱宏仁, 政田 幹夫, 松浦 克彦, 山川 雅之, 渡部 一宏. マルチドーズバイアル製剤の必要性を検討することとした. 6施設を対象に抗がん剤廃棄量のパイロット調査を実施し, 年間1億5千万以上と推計されマルチドーズバイアル製剤の積極的導入が有用と考えられた.
5. 特集: がん患者に対する栄養療法と周辺の問題「院内における抗がん剤曝露の実態とその対策」	共	2013年2月	静脈経腸栄養, 28(2), 619-625	濱宏仁, 橋田亨. 抗がん剤調製時に設備やクロズドシステムによって, 従業者曝露は減少するが, 医療従事者が抗がん剤曝露に対して十分な知識を持ち, 安全に取り扱うことへの意識改革が徹底されてこそ成立する. 汚染が少ないから, 対策を導入しているから安全であるということではなく, 本来環境中から検出されるはずのない抗がん剤が少量であっても検出されることがないように努めなければならない.
6. 先輩が教える薬剤師のノウハウとピットフォールセンター業務 調剤 (注射剤)	共	2012年5月	月刊薬事, 54(5), 729 - 740	福嶋浩一, 濱宏仁, 橋田亨. 注射剤の品質管理や有効性・安全性の確保に必要な事項, 計数調剤時の処方鑑査のポイントを整理した.
7. 抗がん剤調製・投与における安全管理のトピックス 閉鎖式	共	2010年11月	月刊薬事, 52(11), 1777-1789	濱宏仁, 橋田亨. 抗がん剤調製薬液混合デバイス適用の薬剤基準や, 4種類の製品のそれぞれの正しい使い方, 留意点についてまとめた.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3. 総説</b>				
抗がん薬混合器具の手技と留意点				
8. 薬学6年制実務実習モデル・コアカリキュラムの導入における問題点～病院薬剤師の立場から～	共	2009年	医薬ジャーナル, 45, 72-75	濱宏仁, 橋田亨. 平成18年度から1か月間の病院実習を対象に同カリキュラムを試行し, 6年制実務導入時の問題点を見出した.
9. Microsoft AccessRを用いた化学療法剤の調製ラベル・監査情報システム	共	2004年10月	医薬ジャーナル, 40(10), 2757 - 2761	山本健児, 濱宏仁, 平阜正樹, 喜田勝也. 外来化学療法のミキシング業務の効率化を考え, 市販のデータベースソフトを用いた調製ラベル・監査情報システムを構築した. そのシステム内容とミキシング業務活用について報告した.
10. 「外来化学療法センター」開設に伴う薬剤部ミキシング業務	共	2004年9月	医薬ジャーナル, 40(9)2507-2513	濱宏仁, 平阜正樹, 田村昌三, 山本健児, 岩森繁夫, 喜田勝也. 2004年から外来化学療法センター開設に伴いミキシング業務は薬剤部が担当となった. プロトコルに基づく処方監査と調製者の安全を確保した無菌調製について報告した.
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 抗がん薬曝露研究の医療現場からの発信と今後の方向性	単	2020年3月	日本臨床腫瘍薬学会学術大会2020 (第9回)、福岡 (誌上開催)	がん薬物療法の曝露対策は「人は必ず間違える」を前提にリスクマネジメントする必要があり、ガイドラインをそのまま実行することではない。情報を論文として発信することで、次のエビデンス構築へ繋がり、複数の論文が出るとエビデンスレベルは上がる。発信できる研究マインドを持った医療従事者が増えることで、新しい曝露対策へと繋がっていくと考える。
2. 抗がん薬曝露対策はリスクマネージメント	単	2019年07月	第17回日本臨床腫瘍薬学会学術集会、京都	パネルディスカッション「抗がん剤投与の安全性を改めて考えるー曝露対策から予防教育までー」において、抗がん薬曝露対策とは、ガイドラインの方策の実施ではなく、自施設のリスクマネジメントとして問題点の抽出とできる方策の実施、評価の大切さを論説。
3. 曝露対策ガイドラインに関連したエビデンスと単回使用抗がん薬の分割使用についての安全性		2019年03月	抗がん薬曝露対策セミナー in 神戸、神戸	濱宏仁. 曝露対策ガイドライン2019が発刊されたが、その中で自身のエビデンスが引用されている部分を中心にその基データを解説し、加えて単回使用バイアルの分割使用、厚労省が情報提供している基となった研究について解説した。
4. 単回使用バイアルの複数回使用における微生物学的安全性と保管条件	単	2019年03月	日本臨床腫瘍薬学会学術大会2019 ランチョンセミナー、札幌	濱宏仁. 単回使用バイアルの分割使用における微生物学的安全性と保管条件の研究について解説した。
5. 抗がん薬の分割使用とCSTD		2018年10月	栃木がん薬物療法セミナー、宇都宮	濱宏仁. 抗がん薬閉鎖系システムの曝露量の比較と単回使用バイアルの分割使用、厚労省が情報提供している基となった研究について解説した。
6. 抗がん薬閉鎖系システムの評価と抗がん薬の分割使用		2018年07月	抗がん薬曝露対策検討会、京都	濱宏仁. 抗がん薬閉鎖系システムの各社及び金属針の曝露量の違いと単回使用バイアルの分割使用について厚労省が情報提供している基となった研究について解説した。
7. 次世代に求められる臨床薬剤師像		2018年05月	第9回KPUシンポジウム、京都	濱宏仁. これからの病院薬剤師はクリニカルレスポンスを見出し、それを明らかにしていく研究マインドを大切にしていかなければならない。
8. エビデンスから考える抗がん薬曝露対策と今後のCSTDの使い方		2017年12月	豊中市病院連絡協議会 病院薬剤師講演会、大阪	濱宏仁. 抗がん薬閉鎖系システムの各社及び金属針の曝露量の違いと単回使用バイアルの分割使用に同システムがどのように役立つ可能性があるのかについて解説した。
9. 抗がん薬曝露対策における最新の話題		2017年12月	関西注射剤実践懇話会 第29回学術集会、大阪	濱宏仁. 抗がん薬閉鎖系システムの各社及び金属針の曝露量の違いと単回使用バイアルの分割使用に同システムがどのように役立つ可能性があるのかについて解説した。
10. 抗がん薬のDrug Vial Optimizationと抗がん薬閉鎖式薬物移送システム (CSTD) による医療費削減効果		2017年11月	第27回 日本医療薬学会年会、千葉	濱宏仁. 米国の抗がん薬の分割使用を参考に、我が国の抗がん薬の Drug Vial Optimization においての方向性について解説し、抗がん薬閉鎖式薬物移送システム (CSTD) の使用によりそれが実現できる可能性と、それによる医療費削減効果について解説した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
11. USP800と日本の抗がん剤曝露対策		2017年06月	第22回オンコロジーセミナーパネルディスカッション「チームで取り組む抗がん剤曝露対策」、NPO法人がん医療研修機構、東京	濱宏仁. 新規策定された抗がん剤曝露対策が記載された米国薬局方第800章と今後の日本の曝露対策への取り組みについて解説した。
12. 抗がん剤曝露対策の現状と将来 病院における抗がん剤曝露対策「バイアルに起因する汚染と調製時のCSTDの有用性」		2017年05月	第9回日本がん薬剤学会学術大会シンポジウム、枚方	濱宏仁. バイアル表面汚染は流水下の洗浄だけでも十分除去できる可能性が示唆されていること、フィルター式CSTDであっても抗がん剤汚染防止効果は十分にあること等を解説した。
13. 抗がん剤曝露におけるリスクマネジメント		2017年04月	第2回 Preventing hazardous drugs exposure seminar、静岡	濱宏仁. 米国薬局方800章から考えられる日本の曝露対策の方向性とCSTDの最新の知見、抗がん剤の分割使用について解説した。
14. 調製から投与までのCSTD使用による曝露対策の有用性		2017年03月	日本臨床腫瘍薬学会学術大会2017(第6回)、シンポジウム：曝露対策における日本の現状、新潟	濱宏仁. 調製から投与に至るまでの各過程でCSTDを使用した場合の曝露対策の有用性についてエビデンスを交えて解説した。
15. 抗がん剤閉鎖システムの導入とその効果		2016年12月	テルモ（株）神戸支店研修会	濱宏仁. 調製から投与に至るまでの各過程でCSTDを使用した場合の曝露対策の有用性についてエビデンスを交えて解説した。
16. 米国薬局方からみた日本の抗がん剤曝露対策		2016年10月	大阪府病院薬剤師会第9支部(豊能支部)研修会、大阪	濱宏仁. 米国薬局方800章から考えられる日本の曝露対策の方向性とCSTDの最新の知見について解説した。
17. 抗がん剤曝露対策について		2016年09月	大阪府病院薬剤師会第15支部学術講演会、大阪	濱宏仁. NIOSH Alert(2004)を原点とした現在の抗がん剤曝露対策について、調製から投与までの過程のエビデンスを交えて解説した。
18. 米国薬局方からみた日本の抗がん剤曝露対策		2016年09月	第26回日本医療薬学会年会、京都	濱宏仁. 米国薬局方800章から考えられる日本の曝露対策の方向性とCSTDの最新の知見について
19. 抗がん剤曝露対策～ガイドラインとガイドラインに示されていないエビデンスによる検証～		2016年03月	日本臨床腫瘍薬学会学術大会2016、鹿児島	濱宏仁. 抗がん剤曝露対策ガイドラインについて、ガイドラインに示されていないエビデンスも含めた検証を独自の視点で解説した。
20. 抗がん剤曝露対策～ガイドラインとガイドラインに示されていないエビデンスによる検証～		2016年02月	第23回鹿児島県病院薬剤師会がん薬物療法対策講習会、鹿児島	濱宏仁. 抗がん剤曝露対策ガイドラインについて、ガイドラインに示されていないエビデンスも含めた検証を独自の視点で解説した。
21. 抗がん剤曝露を減らす対策		2015年06月	第17回日本医療マネジメント学会学術総会シンポジウム 抗がん剤の曝露対策～医療従事者・患者・家族への曝露の危険性と推奨事項～、大阪	濱宏仁. 現在知られている抗がん剤曝露対策についてエビデンスを紹介しながら解説した。
22. 調製から投与までの抗がん剤曝露対策		2014年11月	抗がん剤治療に伴うリスク低減を考える会、山形	濱宏仁. 調製から投与に至るまでの各過程でCSTDを使用した場合の曝露対策の有用性、抗がん剤バイアル汚染の除去等についてエビデンスを交えて解説した。
23. 調製から投与までの抗がん剤曝露対策		2014年10月	熊本県病院薬剤師会学術講演会、熊	濱宏仁. 調製から投与に至るまでの各過程でCSTDを使用した場合の曝露対策の有用性、抗がん剤バイアル汚染の除去等についてエビデ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
24. 抗がん薬汚染や曝露に関するリスク回避		2014年09月	本第24回医療薬学会シンポジウム18「注射剤業務を医療安全から考える」ーTPN療法、感染症、抗がん剤調製における薬剤師の貢献ー、名古屋	本 濱宏仁. 抗がん薬曝露対策としてバイアル汚染対策や閉鎖式システムの導入は有用であるが、非揮発性薬剤や持続式薬液注入器調製への同システム使用や調製時のプライミング実施にわたり総合的に実施して初めて環境が保持される. 今後同システムがMulti-doseバイアルの導入への問題解決にも繋がればよい.
25. 抗がん薬調製時の曝露とその対策		2014年08月	第52回日本癌治療学会学術集会 臓器別シンポジウム 20 抗がん剤被曝から、患者・医療従事者を守る～抗癌剤被曝の現状と課題～、横浜	濱宏仁. 調製時における抗がん薬曝露防止に閉鎖式器具の有用が知られているが揮発性の高い抗がん薬にのみ使用している施設は多い. 5年間における継続的な環境拭き取り試験から、調製時の曝露対策が不十分では、投与現場での抗がん薬曝露を減らすことができないことが明らかになった.
26. 抗がん薬曝露の実態とその対策		2014年05月	ONCOLOGY ネットフォーラムインターネット中継	濱宏仁. 抗がん薬曝露防止に閉鎖式器具の有用が知られているが、全ての抗がん薬を対象に、全ての投与方法を対象に、調製から投与まで閉鎖式器具を使用し、バイアル洗浄も含めて総合的に行って、抗がん薬曝露を減らすことができる.
27. 曝露対策の現状報告と課題		2014年05月	第6回JSOPP(日本がん薬剤学会)学術大会 シンポジウム 2、平成26年5月、東京	濱宏仁. 神戸市立の大規模病院と中小規模病院の2病院の抗がん剤曝露対策を対比し、その実態と課題を浮き彫りにした.
28. 調製から投与までの抗がん薬曝露対策		2014年05月	テルモケモセラピーセミナーin姫路、姫路	濱宏仁. 抗がん薬曝露対策としてバイアル汚染対策や閉鎖式システムの導入は有用であるが、非揮発性薬剤や持続式薬液注入器調製への同システム使用や調製時のプライミング実施にわたり総合的に実施して初めて環境が保持される.
29. 調製から投与までの抗がん薬曝露対策		2013年09月	テルモケモセラピーセミナー、神戸	濱宏仁. 抗がん薬曝露防止に閉鎖式器具の有用が知られているが、全ての抗がん薬を対象に、全ての投与方法を対象に、調製から投与まで閉鎖式器具を使用し、バイアル洗浄も含めて総合的に行って、抗がん薬曝露を減らすことができる.
30. 抗がん薬曝露の実態とその対策		2013年9月	Mochida Pharmacy Seminar 2013, 仙台	濱宏仁. 抗がん薬曝露防止に閉鎖式器具の有用が知られているが、全ての抗がん薬を対象に、全ての投与方法を対象に、調製から投与まで閉鎖式器具を使用し、とくにバイアル洗浄を行わなければ同システムを使用しても抗がん薬曝露対策とはならない.
31. Meet the expert 抗がん薬曝露0(ゼロ)をめざして		2013年02月	第5回JSOPP(日本癌化学療法、薬剤師学会)学術大会、神戸	濱宏仁. 抗がん薬曝露防止の閉鎖式器具の適応とバイアルへの適合性、表面汚染のあるバイアルの取り扱いによる体内への取込み、インフューザーポンプへの閉鎖式器具の適用等を例に、抗がん薬曝露対策は総合的に行うべきであることを解説.
32. Prevention of Occupational Exposure on Handling of Cytotoxic Drugs in Japan		2012年07月	The 10th China-Japan-Korea Joint Symposium for Clinical Information on Parenteral Drugs, Okayama	Koji Hama. シクロホスファミドのバイアルの表面汚染とそれに触れた薬剤師の尿から同薬が検出されたことを報告し、曝露対策の1つの方策を提示した.
33. 当院における抗がん薬有効活用の研究		2011年10月	神戸市立医療センター中央市民病院 特別講演会、神戸	濱宏仁. 抗がん薬有効活用の方策として、バイアル残液の再利用が考えられる. 微生物学的見地から適合する抗がん薬のみで実施すべきである. その頻回使用の問題点にバイアルゴム栓の複数回使用があるが、曝露防止の閉鎖式器具の使用がその解決策の1つとして考えられる.
34. 抗がん薬による職業曝露防止の取り組み		2011年10月	第21回 医療薬学会年会 ワークショップ 5抗がん薬の安全な取扱いー医療従事者の曝	濱宏仁. 抗がん薬曝露防止の閉鎖式器具の使用を徹底しその曝露防止に取り組んでおり、抗がん薬バイアルの汚染除去の洗浄を行っているが、汚染のない製品があれば非常に有用であり、提供する側の対策も望まれる.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
35. 国内における抗がん薬汚染拭取り試験（環境調査）の現状と今後の展望		2011年02月	露リスクに配慮したGE医薬品一、神戸 第3回 日本癌化学療法薬剤師学会（JSOPP）学術大会 パネルディスカッション：「抗がん剤投与時の患者・医療者の安全確保」、日本癌化学療法薬剤師学会、京都。	濱宏仁。シクロホスファミドの分析は、国外の研究所に委託されていたが、ワイプテストによる分析がコベルコ科研で開始され、公的試験機関との分析の同等性の包括的な評価を行った。シクロホスファミドのワイプ試験から、誤差率および変動係数は目標範囲内であり、分析技術に差異はないと考えられた。
36. 抗がん剤曝露対策に関する諸問題		2009年11月	第12回日本注射薬臨床情報学会・第2回日本癌化学療法薬剤師学会	濱宏仁。抗がん剤曝露対策は、クローズドシステムの使用が推奨され、全ての医療従事者が曝露に対する意識を持ち対処することが重要である。
37. Evaluation of Using Residual Anticancer Agents Based on Microbiological Considerations		2009年04月	The 8th Japan-Korea Joint Symposium for Clinical Information on Parenteral Drugs, Nishinomiya	Koji Hama. 抗がん剤バイアルの残液使用を前提に5製剤について保存効力試験を行った。エトポシド、パクリタキセル、シスプラチン、カルボプラチンでは、微生物接種後の生菌数が減少したが、イリノテカン、ピノレルピンでは一部の真菌で増殖が見られた。抗菌性を有する抗がん剤が明らかになった。残液を再利用した場合の医療費削減効果は、年間590万円であり、残液使用が可能な抗がん薬の再使用による薬剤費削減が示唆された。
38. 抗がん剤Multi-dose バイアルの検討と薬剤経費削減効果		2009年02月	Hyogo Oncology Pharmacists Educational conference(HOPE) 勉強会、神戸	濱宏仁。抗がん剤バイアル5製剤について保存効力試験を行った。エトポシド、パクリタキセル、シスプラチン、カルボプラチンでは、微生物接種後の生菌数が減少したが、イリノテカン、ピノレルピンでは一部の真菌で増殖が見られた。Multi-doseバイアルに適した抗菌性を有する抗がん剤が明らかになった。残液を再利用した場合の医療費削減効果は、1調製あたり2,549円であり、残液使用が可能な抗がん薬の再使用による薬剤費削減が示唆された。
39. 外来がん化学療法における処方監査～当院のデータベースシステムを活用して～		2007年11月	兵庫県病院薬剤師のための勉強会、兵庫県病院薬剤師会、神戸	宏仁。外来化学療法のミキシング業務において、独自に考案した市販のデータベースソフトを用いた調製ラベル・監査情報システムを用いた、プロトコールに基づく処方監査と調製者のスキルを補う方策について報告した。
40. がん化学療法における薬剤業務～肺癌化学療法を中心に～		2007年04月	兵病薬のためのオンコロジーセミナーPart2、神戸	濱宏仁。外来化学療法のミキシング業務において、独自に考案した市販のデータベースソフトを用いた監査情報システムによる処方監査の事例を、肺癌化学療法を例として報告した。
41. アントラサイクリン系抗がん剤の総投与量チェックの必要性～外来化学療法の実例から～		2006年11月	Hyogo Oncology Pharmacists Educational conference(HOPE) 勉強会、神戸	濱宏仁。看護師からの情報をデータベースシステムに登録し活用することで回避できたアントラサイクリン系抗がん剤の累積投与限界量超過症例から、その累積投与量のチェックの必要性を報告した。
42. 外来がん化学療法における薬剤師の役割、肺癌在宅医療研究会勉強会		2006年03月	肺癌在宅医療研究会、神戸	濱宏仁。2004年から外来化学療法センター開設に伴いミキシング業務は薬剤部が担当となった。プロトコールに基づく処方監査と化学療法センター看護師との連携による調製業務全般について報告した。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 【共同研究】帯電微粒子水の抗がん剤への効果に関する研究		2023年8月		
2. 【奨学寄附金】抗がん薬曝露防止およびがん化学療法の効率化に関する研究		2023年6月		
3. 【受託研究】抗がん薬環境汚染の除染効果の検討		2021年5月		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
4.【奨学寄附金】共同 研究テーマ：抗がん 薬点滴注射における 輸液フィルターの検 討		2021年5月		CSTDの新しいデバイスについてのエビデンスはほとんどなく、各メーカーの宣伝用資料が存在するのみである。新しいCSTDの1つについて、操作性等を評価するために、熟練者・非熟練者の薬剤師を対象に調製デモを行い、操作性等について検討した。 単回使用バイアルの複数回使用のガイドライン作成のための研究班。分担研究項目：安全性（分割使用基準）
5.【共同研究】オゾン を用いた抗がん剤除 染の検討	単	2021年2月		
6.【受託研究】閉鎖式 薬剤移送システム (CSTD)の操作性及び 効果の検討	単	2019年10月		
7.平成29年度厚生労働 行政調査事業費補助 金（厚生労働科学特 別研究事業「注射用 抗がん剤等の適正使 用と残液の取扱いに 関するガイドライン 作成のための研究」		2018年1月		

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1.2022年4月～	兵庫県病院薬剤師会 理事
2.2015年～現在	日本がん薬剤学会 理事
3.2011年	東日本大震災 医療チームスタッフとして派遣
4.2008年～	癌治療学会
5.2005年～	日本医療薬学会
6.1995年	阪神淡路大震災 医療支援、避難所活動、救援活動
7.1988年～	日本病院薬剤師会